

第2回幸町地区学校適正配置地元代表協議会 議事要旨

1 日時 平成20年5月22日(木) 午後7時30分～8時45分

2 場所 幸町公民館 ホール

3 出席者

(1) 委員

別添「幸町地区地元代表協議会名簿」参照

(2) 事務局

山崎課長、古館主幹、加茂主査、伊藤主査補、齊藤主事

(3) 傍聴者 4名

4 平成20年度協議会委員の確認

平成20年度協議会の委員について、別添「幸町地区地元代表協議会名簿」のとおり承認された。

5 議題

(1) 第1次の取組みの際の幸町地区の課題について

(2) 学校適正配置の必要性について

(3) その他

6 会議資料

(1) 資料1 地元説明会、地元代表協議会等での主な意見【幸町地区】

(2) 資料2 幸町地区地元代表協議会「協議のテーマ」

(3) 資料3 第1次の取組みの際の幸町地区の課題

(4) 資料4 学校の適正規模について

7 議事の概要

(1) 第1次の取組みの際の幸町地区の課題について

資料2「幸町地区地元代表協議会『協議のテーマ』」のうち、「1 第1次の取組みとの関連」について、資料3「第1次の取組みの際の幸町地区の課題」をもとに、事務局より説明があり、質疑応答を行った。

(2) 学校適正配置の必要性について

資料2「幸町地区地元代表協議会『協議のテーマ』」のうち、「2 学校適正配置の必要性」について、資料4「学校の適正規模について」をもとに、事務局より以下の事項の説明があり、質疑応答を行った。

ア 学校規模によるメリットとデメリット

イ 学校規模の適正化の必要性

ウ 千葉市における学校の適正規模について

(3) その他

ア 次回開催日時・場所

次回協議会は、平成20年7月10日(木)午後7時から9時にガーデンタウン管理センターにて開催することとした。また、次回協議会では、今回に引き続き学校適正配置の必要性について協議することとした。

イ 次々回の協議会開催日について

次々回の協議会が予定されている9月は週休日(土日)に開催することとし、育成委員会の予定等を事務局へ報告することが確認された。

8 質疑応答等発言要旨(敬称略)

議題(2) 学校適正配置の必要性について

木幡

(1点目) 千葉市内の適正規模の学校とそうでない学校とで学力の差やいじめや不登校の差についてのデータはあるのか。現実問題として心配なのは、子どもたちの学力向上につながるのか、いじめや不登校にならないかということである。このように現実には不安に思っていることが、学校の規模によって違いがあるのか知りたい。

(2点目) 資料に「小規模校のメリットとデメリットについて」とあるが、いま現在、実際に小規模校である幸町第四小や幸町第一中で具体的にどのようなメリット・デメリットがあるのか。(資料のような)一般論では話が見えない。

事務局

まず、小規模校と適正規模校との比較であるが、千葉市においては、学校規模による学力の差のデータやいじめ等の差のデータはないが、学力の差については、学校適正配置に取り組んでいる自治体を対象に国が行ったアンケート調査がある。その中では、学校が適正規模になったことにより、学力が上がったと答えている自治体が多くある。いじめ等についても、データはないが現場の先生方からは、小規模の学校の場合は、問題を生じた場合に子どもたちの逃げ場がなくなるという声を多く聞いている。

次に、資料にある小規模校のメリットとデメリットは全国的なものをまとめたものではあるが、千葉市の実態を表したものでもある。幸町第四小、第一中にもあてはまると考えている。

データで(数値化して)把握できるのは、ペーパーで把握できる学力(知識)の差である。適応力、社会性(社会力)、豊かな心、健やかな体力等、いわゆる「生きる力」も学力と捉えれば、それらについては、数値化できるものではない。「生きる力」とは集団の中でいろいろな人間と関わることで養われていくものであり、適正な規模の学校において様々な人間と関わるのが大切だと考える。また、小規模校に勤務している現場の先生方は、よりよい教育活動を行うために、例えば(中学校においては)部活動を掛け持ちするなどして、小規模校のデメリットを少なくするように工夫しているが、適正な規模の学校にすることで、よりよい教育活動が行えるようになると思う。

木幡

つまり、現在の幸町地区の子どもたちの状況を検討した上で適正規模がよいという提案をしているのではないということ。一般論で提案している。昨年実施された学力検査の結果について、11月9日付千葉日報によると、「千葉市の学力は概ね良好」であり、市教委の分析では、その理由は、教員のきめ細かい指導のためとなっている。小規模校のメリットである時間をかけた丁寧な指導のおかげではないのか。市教委は、確かな学力のためには、学校と家庭の連携を強化することが必要とも述べている。学校の規模については課題にしているのではないのか。また、全国的な例として山形県の「さんさんプラン」というものがあるが、これは33人の少人数学級を実施しているものであり、その結果、偏差値が上がったという調査結果が出ている。学力という観点から見ると、学校の規模ではなく、少人数学級が効果的と出ている。これは(第2次適正配置検討委員であった)貞広先生も言っている。

亀田議長

(貞広先生は)低学年には少人数学級が効果的だが、上の学年なるとわからないと言っているのではないか。

布施

自分の子どもは幸町第四小を卒業し、現在幸町第一中に通っているが、実状は不安である。小規模校のメリットは感じていたので、統合により人数が増えることを考えると、とまどいはある。現在の状況より(統合後の状況が)良くなると感じられないと賛成できない。もっと統合によるプラス部分を示してほしい。

益田

自分が子どもの頃は少人数学級や小規模の学校には憧れていたし、先生との距離が近いというのはよいことであると思う。しかし、地域の問題として考えたとき、それがよいかは別問題ではないか。いま、この地域に合った学校のあり方とは何かを考えるのが大切だろう。今年度、幸町第二小と第三小の卒業児童数はほとんど変化していないのに、(その卒業生が入学する)幸町第二中への入学者数は大幅に減った。今の時代と、この地区の子どもたちに合った学校のあり方について検討していくべきだろう。

川島

自分の子どもは現在幸町第一小に通っている4年生である。昨年度までは3年生は38人で1学級、その他の学年は2学級だった。学年の学級数が1学級と2学級の両方があったので、子どもたちの状況の差が見えた。子どもたちの人数が多い学級をみている先生には余裕がないように感じた。親としては、ざわついた学級より落ち着いた学級で子どもを学習させたい。(1学級の)人数が少ない学級で先生のケアが行き届いたほうがよいと思っている。

亀田議長

(今の発言での)「少ない」とは、1学級の人数が少ないという意味であって、学校の学級数が少ないということとは別の問題として捉えてよいか。

川島

昨年度までは、3年生だけが学年1学級38人で、その他の学年は、学年2学級25人程度であった。

亀田議長

それは、学級編制の基準で40人を超えたから2学級になったということで、38人は40人を超えていないので1学級であったということ。今（協議会で）考えているのは、1学級の人数のことではなく、学校の規模のこと。少し観点が違うように思うがいかがか。

細谷

40人学級でも、先生の目は届くので、心配ないと思う。

外山

先日中学校の運動会に行ったが、人数が少ないと活気がないので、ある程度の人数は必要なのではないか。千葉市で既に統合した学校はあるのか。

事務局

花見川第四小と花見川第五小を統合した花島小がある。

外山

その学校の統合後の地域や学校の状況がわかるものはあるのか。

事務局

統合後の状況についてはアンケート調査を行っており、子どもたちの9割から、友達が増えてよかったという意見がある。（学校の）人数が多くなってざわついたという意見もあるが、活気が出てきたという意見もある。教員からは、1学年が2学級になったので、教師同士で互いに相談できるようになってよいという意見や、運動会などの行事も活発になったという意見が多く出ている。

事務局

1学級あたりの人数についてであるが、音楽や体育は、学級にある程度人数がいたほうがよいが、1学級の人数が少ない少人数学級のほうがよい授業もある。統合して学校規模が大きくなっても、少人数での授業を維持できる対応をしていきたいと考えている。

議題（3）その他

阿南

（教育委員会が4月に発行した）「千葉市の教育」に花島小のことも載っている。委員は予習しておいたほうがいいので、配布すべきである。

事務局

（「千葉市の教育」はこの場で配布。）

「教育だより ちば 4月号」にも花島小の記事があるので、そちらも後日送る。